

デビルな社長と密着24時

プロローグ 二十四時間じゃ足りない！

私、奥本<sup>おくもと</sup>一花<sup>いちか</sup>の一日は、二十四時間じゃとても足りない。仕事とか、趣味とか、趣味とか、趣味とか……！とにかく毎日、多忙を極めているのだ。

あと十分……この十分が長いんだよね……  
仕事をこなしながらも腕時計を何度も眺めてしまう。顔は平静<sup>よそよそ</sup>を装<sup>まも</sup>いつつ、心の中はソワソワしていた。

残り一分……定時の十九時がきたーっ！

「奥本さん、上がっているよ」

遅番で私より一時間遅く出社した先輩に声をかけてもらい、「お先に失礼します」と持ち場を離れる。それから素早くタイムカードを押し、制服から私服へ急いで着替えた。定時を迎えたら一分一秒でも早く退社！それが私のモットーだ。十九時八分に職場であるデパートを出て、書店へ急ぐ。

はあああ……今日も疲れた！でも、仕事はお金を得るための手段だ。明日も明後日も頑張つて働かなくちゃ……趣味を満喫するために、軍資金が必要である。

書店に到着した私は、新刊コーナーへ一目散に向かい、買い集めている漫画の最新刊を手取る。ふふふ……ずっと楽しみにしてたんだ。

書店では新刊の他にも一冊、表紙が気になった別の本も購入した。電車の中で見てしまいたいのをなんとか我慢し、ようやく自宅へ到着。

じっくり読みたいから、楽しみは後に取っておくのだ。

帰宅してからも今すぐ読みたい気持ち堪えて、夕食やお風呂を済ませた。

部屋に戻ってきたのは、二十二時……ここからが私の最も大切としている趣味の時間だ。

楽しみにしていた新刊と表紙が気になって買った漫画と、どちらを先に読むか……重要な問題だ。悩んだ末に、表紙が気になった本から読むことにした。この本が自分好みじゃなかった場合のダ

メージを、楽しみにしていた漫画で相殺する作戦だ。

漫画を保護しているビニールテープを剥がして、いざ、漫画の世界へ！

「はあ……もう、最高だもん。早く続きが読みたい……」

結果から言うと、両方楽しめた。気が付いたらすでに二十三時三十分、あと数時間で深夜アニメタイムだ。今日は一時三十分からお目当てのアニメが放送される。

「眠い……」

でも、寝ない。

地道に貯金して買った四十インチのテレビには録画機能も付いているけれど、できるだけリアルタイムで、SNSで実況しながら見たいからだ。

まあ、後で見返す用に、録画もするけどね。

「作業もしたいけど、ゲームもしたいし……」

作業とは、コスプレ衣装作りのことだ。

私の趣味は、漫画、アニメ、ゲームを楽しむことで、その中でもコスプレ衣装作りに特に力を入れている。ちなみに今作っている衣装は、今日放送されるアニメの主人公のものだ。

作った衣装を着てイベントに参加することもあれば、友達のために作ってあげて自分は着ないこともあったり、ただ作って満足することもあるけれど、どのパターンにしてもトルソーに着せて写真を撮り、必ずブログにアップしている。

記念としても残るし、誰かに見てもらいたいし、反応がもらえたら嬉しいしね。

でも、自分の顔がわかるものは一切載せないようにしている。以前オタクじゃない友達に趣味がバレて酷い目にあつてからは徹底しているのだ。

働かなくてよければ、作業もゲームもガッツリできるのにな……

でも、仕事があるからこそ、こうして漫画やコスプレ衣装用の材料だつて買えるわけ……

そんなことを考えながら、スマホをいじりSNSに独り言を投稿する。

「『アニメ放送まで待機中！ 衣装も作りたいけど、オンラインゲームもしたいし、どうしよう……』 つと……」

すると、インターネット上の友人から次々と反応が返ってくる。

『ハナハナさん、お疲れ〜！ コスプレイベントまでまだ時間あるし、欲望のままにゲームするに一票！』

『ゲームの期間限定イベントもそろそろ終了するし、ゲームしちゃえ！』

あく……心がゲームに傾いていく！

あ、ちなみに『ハナハナ』というのは、私のハンドルネーム。本名の『一花』の『花』から取っている。専門学校時代から八年間も使っているの、本名と同じくらい愛着のある名前だ。

ゲームをすすめるメッセージが続く中――

『ゲームは三十分だけにして、あとは作業をしたらどうですか？ イベントまでまだ時間があるとはいえ、それまでに体調を崩したりなんてことがあれば、予定が狂うかもしれないし。余裕は大切ですよね！ 衣装を完成させて、もし時間が余ったら、さらにクオリティも上げられるし……いかがでしょうか？』

という反応が返ってきた。

それを見て、確かに！ と納得する。

時間は少ないけどゲームをやったっていう満足感も得られるし、なにが起きるかわからないのだから、作業は早いに越したことはない。

現に私は去年、イベント前に風邪をこじらせて熱を出してしまい、衣装を間に合わせる couldn't できなかった。

――こんな風に、いつも親身な返事してくれるのは、歌穂<sup>かほ</sup>さんだ。

一年ぐらい前に私がブログに載せているコスプレ衣装の画像を見て、感想を送ってきてくれたのがキッカケで親しくなった。

今ではスマホで直接やり取りをしたり、ゲームでオンライン対戦をして遊んでいる仲だ。

歌穂さんは私と同じ二十六歳で、都内で事務員をしているらしい。彼女もコスプレ衣装を作っているのが趣味で、ブログやSNSに衣装を公開している。着用した画像は載せていないけど、私にだけはこっそりメールで送ってきてくれている。

スラリとした美女で、そのスタイルの良さといい、顔立ちといい、芸能人に引けを取らないレベルだ。そして作り出す作品もすごい。細部にわたってもものすごいこだわりが出ていて、叶うなら手に取ってじっくり眺めてみたいと思う。

『そうですね！ なにかあるかわからないし、歌穂さんの言う通り、イベントの衣装優先にします！ ってことで、まずは三十分ゲームしてきます！』

返信したところで、ゲーム機の電源ボタンを押し、立ち上げている最中にスマホで三十分のタイマーをセットしておく。

ゲームソフトを起動させると、現在オンラインでプレイしているフレンドが三人いた。

フレンド登録をしておく、こういったこともわかる仕様だ。そのうちの一人が歌穂さんであることを確認した私は、彼女にスマホで個人的にメッセージを送る。

『さっきは反応ありがとうございました〜！ よかったら三十分だけ対戦いかがですか？』

送信して間もなく既読マークが付いて、返信が来た。

『今オンラインになったの見て、声かけようと思ってたところでした。やりましょう!』

「やった!」

嬉しくて思わず声に出してしまう。

三十分なんてあっという間で、その後はアニメ放送の開始時間まで衣装制作に取り掛かる。

「うん、やっぱりいい出来……!」

自画自賛しているのは、胸元に付けるコサージュだ。何度も練習し、試作を重ねたことで、かなりいい出来だ。

自分で言うなと突っ込まれそうだけど、店で売っているものと変わりにくくらい素晴らしい出来!

——おっと、熱中していたらアニメ放送時間まであと五分だ。

大分集中してたなあ……こういう系の仕事に就いたら、きつとすごい頑張れちゃいそう。

……なんて、ね。自分の好きなことを仕事にしたい! だなんて夢を叶えられる人は、ほんの一握りだっかわかっている。そんな才能はないと自覚しているから、目指すつもりはない。仕事はあくまで仕事だ。生活と、好きなことをするために必要なお金を稼ぐためにするもの! ちゃんとわかっている。

アニメを見ながらSNSで実況を楽しみ、終わった後に感想を投稿していると、三時過ぎてしまった。

明日は早番だから、六時三十分には起きないといけない。

コスプレ衣装の胸元に付けるコサージュはあと三個必要だ。

まだ作り続けたいところだけど、さすがにもう寝ないと明日に響くよね。

大きなあくびをしながら机の上を軽く片付けて、ベッドに入った。

これが私の一日の流れ。趣味を楽しむには二十四時間じゃとても足りない。

あーあ、宝くじでも当たらないかな……そうすれば仕事を辞めて、オタク活動に専念できるのに。次に宝くじが発売されるのって、いつだったっけ?

そんなことを考えているうちに、いつの間にか眠っていたのだった。

「レジお願いします。クレジットカード、一括払いです」

「かしこまりました」

私はショッピングの販売員からクレジットカードとデパートのポイントカードを受け取り、精算を済ませて返す。

イベントまで約二週間と迫り、昨晚も遅くまで衣装作りをしたため今朝はかなり眠かった。でも、なんとか寝坊せずに起きられて、本当に良かった……！

デパート内のショッピングには、レジが併設されていないことも多い。

そういった場合には裏にデパート側が雇っているレジ係がいて、そこで決済しているのだ。

流れとしては、こうだ。まずは各ショッピングで販売員が接客し、そしてお客様が購入することになると、お金、クレジットカード、商品券のいずれかとポイントカードをお預かりする。そして同じフロア内にあるレジコーナーに持ってきて、レジ係に頼んで支払い処理をし、お客様のところへ戻り、商品を渡すのである。

私は、そのレジ係だ。ひたすら支払い処理をするのが仕事で、専門学校を卒業した二十歳の時から始めたので、もう六年目。

初めはすごく緊張したし、失敗もした。でも、慣れてしまえば単純作業だ。レジに新しい機能が追加されればやっぱり戸惑うし、緊張するけれど、繰り返していればちゃんと慣れてくる。

「レジお願いします。現金払いです」

「かしこまりました」

支払い処理を済ませて、おつり、レシート、ポイントカードの載った皿を販売員に返すと、彼女は受け取り損ねて、そのまま床に落としてしまう。

「きゃっ！ ごめんなさい！ 私、ぼんやりしてしまって……」

拾おうとしやがむ彼女に続いて、私もしゃがんで拾う。

彼女はおつりの小銭を掴もうとするけれど、綺麗なネイルアートを施した爪が長くて、上手く掴めないみたいだったので、代わりに拾った。

「おつりの五百円とレシートとポイントカード、全部あると思いますので」

「ありがとうございます。ごめんなさい。今日はお客様がすごく多くて、休憩も取れないぐらい接客し通じたつたから、ぼんやりしてしまって……」

「いえいえ、お疲れ様です。今日は催事……とかではないですよね？」

私がレジを担当しているのはファッションフロア。二十代から三十代向けの女性を対象としたショッピングが並んでおり、見た目が華やかな人が非常に多い。

「実はアニメとのコラボ商品が入荷されたので、朝からそれを買にくるお客様が多くて……！ しかも絶対うちの服なんて着なさそうなおタクっぽい服装の人も来てるんですよ。あんだ、それ

買ってどうすんの？ 絶対着こなせないでしょ！ って言いたくなっちゃいます。もう……なんでアニメなんかとコラボするんだろ。意味わかんない」

う……

「そ、そうなんですわね……」

同じオタクとして、耳が痛い。

昔よりは緩和されたとはいえ、オタクへの風当たりは厳しい。私も昔オタバレをして酷い目にあつてからというものは、徹底してオタクであることを隠している。

——あれは、高校生の時のことだ。

私は元々田舎に住んでいたのだけど、父の転勤に伴い都内の高校へ進学することとなった。中学の時はオタクであることを隠さずに楽しく生きていたもの、高校ではオタクはキモイ！ という空気があったので、徹底して隠して過ごしていた。

そうして高校生活を楽しんでいるうちに友達に彼氏ができ始めて、周りに流された私は、彼氏と所作ったほうがいいのか？ とぼんやり思い始めたのである。その矢先、クラスメイトの佐川君から告白されたので、付き合うことにしたのだった。

でも私は、オタクであることを隠していただけで、家では今のようにオタク活動に勤しんでいたわけ……

彼氏とデートしたり、メールのやり取りをする時間もつたいなくて、わずか一か月で別れた。

彼には本当に申し訳ないことをしたと思う。

彼に酷いことをした罰が当たったように、それから数か月後、最悪の形で友達にオタバレした。今考えると、とても迂闊だったと思う。

当時の私も今のようにブログをやっていて、そこではアニメ、漫画、ゲームのことについて語ったり、コスプレした画像も載せていた。しかも顔が思いっきりわかる状態で……思い出すだけで悶絶しそう。完全なる黒歴史だ。

それが偶然にも友達にバレて、瞬間に広がった。昨日まで友達だった人から避けられ、陰口を叩かれ、仲間外れにされて暗黒の高校時代を送ることに。だから卒業後は非オタクの人にオタクがバレないように徹底して生きていくようになった。私がネット上で顔を出さなくなったのは、これが理由だ。

高校を卒業して、服飾系の専門学校に進学してからは楽しかった。

中学校時代のオタク友達がこちらに進学してきたのと、学校で新たにオタクの友達ができたので、みんなでコスプレのイベント活動もしたし、一人暮らしの友達の家を集まって、何度も朝までオタクトークで盛り上がった。

ちなみに服飾系の専門学校に進学したのは、コスプレ衣装を作るのが好きだったから。その腕をもっと磨きたかったのと、将来はファッション系の仕事に就けたらいいなあとぼんやり思ったためだった。

……まあ、どうしてそれがデパートのレジ係になったかと言えば、これについてもまた苦い思い出がある。

専門学校時代、将来のことを真剣に考えた時、まず興味を持ったのは、アパレルショップの販売員だった。

経験を積んで実力を伸ばすことができれば、年齢的に販売員をできなくなってもステッパアップして、スーパーバイザー、マーチャンダイザー、バイヤーといった本社勤務に移り、未永くファッション業界にいられると考えたからだ。

そして一年生の冬、オタク活動の資金を得る目的もあり、アパレルショップの販売員のバイトを探すことにした。

するとたまたま、オシャレだなあ〜…着てみたいなあと思っていたショップが販売員のバイトを募集していたので、ここで働いてみたい！と張り切って応募した。

早速面接が行われることになったのだけど、その場で店長にかけられた言葉は――

『え、どうしてうちのバイトに応募しようと思ったの？』

『ずっと素敵だと思っていて、私も働いてみたいと……』

『いやいや、そうじゃなくて、どうしてうちで働けると思ったのかってこと。うちのブランドはね、特別なの。バイトとはいええ、選り抜いた子を雇ってるの。あなたみたいな人間が、よく応募する気になったよね〜…ビックリ〜！』

『え……』

店舗には面接するスペースがないからと、近くのカフェで行われていた。

あまりにも辛辣な言葉に、私の身体は目の前にあるアイスコーヒーの中に浮かんでいる氷よりも

冷たくなった気がした。

――もしかして私って、普通の恰好をして、普通に喋っているつもりだけど、イケてないオーラが滲み出てる……とか!?

こ、怖い……！ 真実が気になるけど、怖くて知りたくない！

そのことがトラウマになってしまった私は、販売員を目指すのをやめた。

メンタルが弱すぎるでしょ！ そのショップの店長が特別感じが悪かっただけで、他のショップなら絶対大丈夫だよ！と友人は慰めてくれた。でも、どうしても行動する気になれず、結局はデパートのレジ係になった。

淡々と支払い処理をし続ける仕事に情熱を燃やすのは難しいけれど、ファッションフロア担当というところで、支払い処理をしにくるショップ店員のコーディネートや、店頭に並んでいる流行の最先端の服を見ることができるとは、唯一楽しいと思えるところだ。

「奥本さん、休憩、お先にどうぞ」

ぼんやりと昔のことを思い出しているうちに、ショップ店員さんは帰ったようだ。はっとして顔を上げ、交代に来てくれた同僚に返事をする。

「ありがとうございます。じゃあ、お先に頂きます」

休憩時間は交代制で、特に順番は決まっていない。その時に手が空いている人から………というのがいつもの流れだ。



一度ロッカールームへ行き、お弁当とスマホを持って、従業員専用の休憩室へ向かう。お弁当と言っても、立派なものではない。一つは焼きたらこのおにぎり、もう一つはおかかのおにぎり、おかずは作る気力がないのでナシ！

これが、朝作れる私の精一杯だ。  
夜中までオタク活動をしているので、おかずを作る時間があれば眠っていたい。ちなみに焼きたらこと言っても、手抜きしてレンジでチンするだけなので、正確に言うとは焼いてない。

できればお昼は外食したいけど、少しでも節約してオタク活動にお金をかけたいのでこれで我慢だ。

それにしても、たまにはお店でランチしたいな……でも、一人でランチってなると、勿体ないような気がするんだよね。

おにぎりを食べながらスマホを眺めていると、中学時代からの友達で、オタク仲間の瑞樹からメッセージが来ていた。

『お疲れ〜！ 明日、休みなんだ！ 一花は出勤？ 買いたい物もあるし、デパートに行くから、よかつたらランチしようよ』

ちょうど明日は出勤だ。

『ランチしよう！ 何時に休憩入れるかわかんないけど、十一時から十三時の間になると思う！ 大丈夫？』

と送信すると、すぐに返事がきた。

『わかったー！ 終わったら連絡して。それまで時間潰してるから』

やった！

おにぎりそつちのけで友達とやり取りしているうちに、あつという間に休憩時間が終わった。おかげでおにぎり一つしか食べられず、就業時間中に恥ずかしいお腹の音を鳴らすことになってしまった。



翌日のお昼、十二時に無事休憩に入れた私は、瑞樹とデパート内にあるカフェでランチをしていた。

私はハンバーグプレートとアイスティー、瑞樹はオムライスプレートとアイスコーヒーを頼み、食べながら会話に花を咲かせる。

「こうして会うのは久しぶりだけど、いつも連絡取ってるから、あんまり新鮮味ないよね」

私が笑うと、瑞樹もつられて笑う。

「本当にね〜！ ね、衣装の進捗はどう？」

瑞樹の質問に、私は顔を引き曇らせる。すると、まだなにも言っていないのに、瑞樹は私の表情から状況を読み取ったらしい。

「あ……ちょっとマズイ感じ？」

「うん……遅れ気味。出だしは順調だったんだけど、作ってるうちにだんだん欲がでてきちゃって、当初は予定してなかった襟と裾にビーズを縫い付けたいな〜と思って始めたら、全然終わらなくて！」

昨日も深夜四時まで延々とビーズを付けていた。ずっと細かい作業をしていたせいか、今日は目がすごくシヨボシヨボする。

「うわー……それキツイ！ イベントまで二週間しかないし、ビーズは諦めたら？」

「いやー！ 付けたらすっごい可愛いんだよね！ だから絶対付けたいっ！」

「でも、大丈夫なの？ 間に合う？」

「うん、間に合わせる！ 昨日も朝方まで頑張ったしね！ この調子でいけば、なんとか……！」

「あー……それで疲れた顔してるんだ。出来栄が良くても、着る本人が酷い顔だったら衣装が可哀想だよ。当日までに顔のコンディションも整えたほうがいいよ」

「そうなんだけど、顔のコンディションを整えるには睡眠でしょ？ たっぷり寝たら作業が終わんないよ。それなら衣装を完璧にすることを目指す！」

「あはは、一花らしいわ。この前、途中経過で見せてもらったコサージュもすっごいよかったよ！」

「でしょ？ 自画自賛しちゃうけど、練習した甲斐もあつてすっごく良くなったんだ〜！ あっ！ ねえ、アレにもビーズ付けたら可愛くない？」

「ええ!?」

「こういうビーズなんだけど……」

スマホで撮っておいたビーズの写真を瑞樹にすかさず見せる。自分でその画像を見ながら、コサージュに付けたら絶対に可愛いという確信が生まれた。

「いや、可愛いけど、今でも精一杯なのに、追加でなんて無理でしょ！」

「でも、可愛くなるってわかっているのに妥協したくないよ〜！ 決めた！ コサージュにもビーズを付ける！ 今日から二時間睡眠で頑張るわ！」

「一花はコスプレに対してのこだわりが半端ないから、止めても聞かないだろうし応援するわ。まあ、頑張つてよ！ 当日楽しみにしてるからさ！」

「うん！ 期待してて！ すっごいの作るよ〜！」

盛り上がっていると、隣の席にグレーのスーツを着た男性客が一人座った。

何気なく顔を見ると、あまりにも整った顔立ちだから驚いてしまう。

短く切り揃えられたダークブラウンの髪に、キリツとした凛々しい眉と切れ長の目で、とても芯が強そうな印象だ。

外国人みたいに高い鼻はシュッと通っていて、薄い唇は綺麗な形をしている。

ただメニユーを眺めているだけなのに、すごく絵になる。

うわあー……カッコいい！ というか、タイガーアイ様にすっごい似てない!?

タイガーアイ様とは、私が今ハマっているPCブラウザゲーム『ストーン・コレクション』に出てくるキャラクターだ。

ちなみに『ストーン・コレクション』がどんなゲームかというと、石を男女のキャラクターに擬

人化させた『ストーンヒューマン』と呼ばれるキャラたちを集め、敵と戦わせて強化していく育成型シミュレーションゲームだ。アニメ化もされ、現在絶賛放送中！

ちなみに今、私がコスプレ衣装を作っているのは女性キャラの中で一番好きなストロベリークオーツのものだ。

ストロベリークオーツちゃんは、タイガーアイ様とカップリングされた同人誌をよく見かける。

ちなみに二人のカップリングは「タイスト」と呼ばれていて、私も大好きだ。クローゼットの中には、大量のタイストの同人誌（R-18を含む）がギッシリと詰まっている。

「一花、ちよつとメッセージ送ったから見てよ」

「うん？」

スマホ画面を見ると、瑞樹から『隣に座った人、タイガーアイ様に似てない!?』とメッセージが来ていて、強く頷いた。

「似てるっ！」

「ねー！ すごい。こんなことってあるんだね」

まさか、現実世界でタイガーアイ様に似ている人を見られるとは思わなかった。

眼福がんぷく……！！ コスプレして欲しい！

思わずジッと見ていたら、私の視線に気が付いたらしいタイガーアイ様……じゃなくて男性が、顔を上げた。

あ、ヤバッ……！！

見過ぎた……絶対に変な人だと思われたよ。失敗した。

慌てて男性からハンバーグプレートに視線を移すと、瑞樹が小声で「見過ぎ！」と笑う。私は咳払いをして、別の話題を探す。

「あー……そうだ。ところで瑞樹は最近、仕事はどうなの？」

「取り立てて変わったことはないよ。一花は？」

「私も変わらないよ。困ったこともなければ、嬉しいこともないし、ただただ時間が流れていくって感じ。毎日宝くじが当たらないかなーって思ってるよ」

「でも、なんだかんだ言って仕事、続いてるよね。もう六年でしょ？」

「うん。支払い処理しにくるショップ店員の服を見たり、トイレとか休憩に行く時に店頭のディスプレイ見られるのは楽しいんだけどね……」

「一花、服好きだもんね」

「もー……見てたら、欲しいものありすぎて大変だよ。安月給だから、あんまり買えないけどさー」

さつき見た帽子、すごく可愛かった。欲しいけど、結構強気な値段設定だったなあ……来月は欲しいゲームが発売になるし、コスプレ衣装用の材料も買わないといけないから、手が出ない。セールまで待つか……いや、可愛いからセール前に売れちゃうかも。

「いっそのこと好きなブランドのショップの店員に転職したら？ 二十六歳なら、まだ雇とってくれでしょ。その店で働けば、社割もあるわけだしさ」

「む、無理無理無理っ！ あの悲惨ひげんな面接事件！ 覚えてるでしょ？ 私なんかにはショップ店員は、

絶く対無理！」

「ええ？ そうかな？」

「そうだよ！ それにノルマとかあるんでしょ？ 私から買ってくれるお客さんなんていないよ。

一人だけノルマ達成できずに、胃が痛くなりそう」

「ネガティブすぎでしょ！ 何度も言うけど、あれはたまたまだって」

なんだか、視線を感じる……しかも、タイガーアイ様似の男性のほうから。

恐る恐る視線をそちらに向けると、男性は眉を擗めてジトリとこちらを睨んでいる。

もしかして、声大きすぎた!?

『ヤバイ！ すごい睨まれてる！ 声大きすぎたかも！』

男性に聞こえたら気まずいので、またスマホで瑞樹にメッセージを送る。

『了解。声、抑え気味で行こう！』

その後は声を潜めて語り、ほんのわずかな時間だったけれど、楽しいひとときを過ごすことができた。

お昼休憩を終えた私は持ち場に戻り、ふたたび業務に就いた。

あー……眠い……

昨日も遅くまでコスプレ衣装を作っていたせいもあり、お腹がいっぱいになったら、激しく眠たくなってきてしまった。

レジ、間違わないようにしないと……

支払い処理に来る人が途絶えた途端、あくびが出そうになる。

ダメダメ！ たるんできると思われちゃう。

あくびをかみ殺していると、カツカツというヒールの音が近付いてくる。

「クレジットカード、一括で」

あ、エンプレスの店員。エンプレスは若者を中心に人気のブランドで、うちのパートでもかなり売り上げを伸ばし続けている。

「かしこまりました」

エンプレスの店員は、ツンとしていて全員苦手だ。今、目の前にいる彼女も、私が支払い処理をしている間、腕を組んで仁王立ちし、早くしろと言わんばかりに大きなため息を吐く。

エンプレスの社員は皆、私のことが気にくわないのかな？ と最初は思ったけれど、他のレジ係

や他店のショップ店員にも同じ態度を取っていることが判明した。

自分のショップ以外の人間は見下しているみたいで、やな感じ！

「お待たせしました」

彼女は無言でカードの載った皿を奪い、またカツカツとヒールを鳴らしながら自分のショップへ戻っていった。

……いちいち腹を立てても仕方がないとわかっていても、腹が立つものは立つ。

でもあの店、すごく素敵な服がたくさん置いてあるんだよね……

悔しいし、気まずいからこのパートのショップでは買ってないけど、別の駅ビルに入っているエンプレスで、よく買っている。

「ん？」

ふと、レジから視線をずらしたところ、床にレシートが落ちていた。

ちょうど手が空いていたので拾いに行くと、私が担当したものだった。しかも今、支払い処理を済ませたばかりのエンプレスのもので、クレジットカード決済のお客様控えた。

早く渡さなきゃ、大変！

「すみません。少し持ち場を離れます」

「あ、はい」

近くにいた同僚に声をかけ、走ってエンプレスに向かう。

ううう、寝不足のせいで頭がぼんやりする。走ることで確実にスタミナが減っていくのがわかる！

店内では先ほどの店員が、ちょうどお客様に商品を渡しているところだった。

「失礼します。あの、クレジットカードのお客様控えです」

そう伝えたあと小声で、「レジの近くに落ちていました」と言い添える。お客様を前にして、どこで拾ったかは言わないほうがいいかと思っただけで、後々『渡し忘れたんじゃないの？』と因縁を付けられては敵わないので、彼女にだけ聞かせるように、小さな声でこっそり伝えた。

彼女は無言でそれを取ると、お客様に手渡す。

「こちらお客様控えです。スタッフが渡し忘れたみたいで、すみません！ よく言っておきますので。あっ！ 今日買って頂いたワンプレ、これからの季節大活躍しますよ。たくさん着てくださいね」

……えっ！

渡し忘れたスタッフって、私？ なに、サラリと人のせいにしてんの！

でも、お客様の手前、突っかかるわけにはいかない。

腹立つ……！

モヤモヤとイライラを抱えたままショップを出ると、店頭で別の店員がボディに新しい服を着せていた。

——悔しいけど、やっぱりこの商品は素敵だ。それにコーデイナーもセンスがいい。

「あ、待つて。そのバッグじゃなくて、こっちのバッグを合わせて」

「えっ！ これですかあ？ あの、なんだか合わないような……」

私も心の中で同意する。そのバッグよりも、すでに置かれているバッグのほうがずっと合ってる！

「ああ、私のセンスを疑わないでよ。本社からの指示なんだよね。このバッグ、かなり売れ残ってるから、少しでも売りたいんだってさ」

「あ……ストックの中にもたくさんありますもんね。正直これ、ダサイですよ」

「まあね。でも、こうしてコーデイナートさせれば、少しはよく見えて売れるでしょ？ お客様に

も積極的におススメするようにね」

ええ……だからって、合つてないバッグをコーディネートするの？ ダサいと思うものをおススメするの？ それって……

「あんまりだよ……」

寝不足でぼんやりしていたせいか、つい口から出てしまった。

「はあ？」

エンプレスの店員たちがすごい形相でこちらを睨みつけている。しまった、失言……！

「あ！ い、いえ、すみません。なんでもないです」

店員たちは綺麗な顔立ちをしていることも相まって、かなりの迫力だ。背中に冷や汗が流れる。蛇へびに睨にらまれた蛙かえるって、こんな感じ？

「今、『あんまり』って言ったでしょ。なにがあんまりなわけ？」

「い、いえ、あの……」

「なに？ ハッキリ言いなさいよ」

言えるわけがない！ でも言わないと、余計神経を逆撫さかでしそうだ。

……えーい！

「その……さっきのバッグのほうが合っていたな……なんて……」

「はあ？ たかがレジ係のくせに、口出してこないですよ。あなたには関係ないでしょ！ 黙つてな

さいよ」

「で、でも、ハッキリ言えって……」

「あなたの意見なんて求めてないし！」

「す、すみませっ……」

ひえええええ……！

総攻撃を受け、情けないことに泣きそうになる。思わず後ずさりすると、誰かにぶつかった。お客様だろうか。

「あっ……申し訳ございません……っ」

振り返って謝つたところ、そこに立っていたのはさつきカフェにいたタイガーアイ様似の男性だった。

私がぶつかったことにはまったく反応していない様子で、眉間に皺しわを作り、言い合いの原因となったコーディネート済みのボディを見ている。

店員たちは、すかさず声を上げた。

「いらつしやいませえっ！ なにかお求めですか？ 彼女さんへの贈り物とかですかあ？」

「新作色々入ってますよお。どうぞ、見て行ってくださあい」

声のトーンと態度が、私の時とは全然違う！ すごい笑顔！ いや、お客様に対してなんだから当然かもしれないけど、この人がイケメンだからっていうのも絶対あるよね！

タイガーアイ様に似てるこの人がエンプレスの店員にデレデレするところを見たくないし、さっさと立ち去ろう。

「……センス悪っ」

エンプレスの店員は、男性の思いがけない言葉に驚いてキョトンとしている。私も同じく目を丸くした。

へ……？

「よくこんなものを店頭に出せるな」

「なっ……」

エンプレスの店員は私に言ったように男性にもなにか言いたかったようだけれど、一応お客様と思い直したようで、グツと堪えて、口を嚙むのがわかった。

「なあ、あんたもそう思うだろ？」

男性は私のほうを向いて、同意を求めてくる。

「えっ!？」

エンプレスの店員が、視線で人を殺せるんじゃないかってぐらい怖い顔でこちらを同時に見る。

「い、いえ、私は……その、別に……」

センス悪いって思う！ でも、この状態で本当のことが言えるわけない！

「マジで言ってるのか？」

男性はギョツとした様子で、私の顔をまじまじと見てくる。

「え、ええ……まあ……はは……」

はは……じゃないよ。お願いだから、私に振ってこないで〜！

「ふうん」

冷たい声だった。いや、冷たいっていうか、呆れたっぽい声……のような気がする。

「揃いも揃って、センスのない奴ばかりだな。服が可哀想だ」

「えっ……」

男性はそれだけ言うと、スタスタとどこかへ歩いて行った。

店員たちはすかさず、口々に文句を言い合う。

「なっ……なんなの、今の……!」

「イケメンだけど、心は不細工じゃん！ 腹立つ……!」

——い、今だ！

これ以上エンプレスの店員と揉めることにならないように、私は騒ぎに乗じてサッと持ち場に戻った。

……はつきり言わなかった私も悪いけど、言い方キツすぎじゃない？ あんな人、全然タイガーアイ様じゃないよ！ 外見は似てても、性格は全然違う！ タイガーアイ様は情に厚いんだ！ というか、お願いだから、私に振らないでよ……!」

眠気は飛んだけど、すごい疲れた。衣装作りが遅れるとはいえ、今日は徹夜……無理かも。

仕事を終えて家に帰った後、作業が遅れているにも拘らず、私は泥のように眠ってしまったのだった。



「一花、すごい！ 最高の出来じゃん！ SNSで一部公開してたの見た時からすごいな〜って思ってたけど、こうして全体で見るともつとすごいよ」

「ありがとう。頑張ったよ〜！ 瑞樹のエンジェライトちゃんもすごいいいよ！ 頑張ったね」  
「気合い入れたからね〜！」

——タイガーアイ様似の毒舌男に遭遇した二週間後、私はコスプレイベントに参加していた。ストロベリークオーツちゃんの衣装はフリルが多くて、すごく大変だったけれど、とても作り甲斐があった。ピンクのメッシュを入れた金色のウィッグをかぶって、目にはピンクのカラコンを着けている。

いつもは裸眼だから、瞬きするたびにコンタクトの違和感がすごい。でも、完璧なコスプレをするためには我慢だ。

瑞樹に大絶賛され、他の参加者さんにも褒めてもらうと、あの苦労した日々が報われていく。

あ〜……この瞬間、堪らない！ すっごい滾る！ 頑張つてよかった！

今日のイベントは、大きなビルの一室を貸し切つて行われている。ストーン・コレクションのオンラインイベントで、同人誌の即売会がメインだけど、コスプレ参加もOKなのだ。

「あの、すみません。一緒に写真を撮ってもらえませんか？」

「あつ……ごめんなさい。私、写真はNGで……」

「そうだったんですね。いえ、私のほうこそごめんなさい」

同じコスプレイヤーさんから、一緒に写真を取つて欲しいと頼まれるたびに断るのは心苦しい。でも、顔まで写つた画像をSNSに公開されたら、また悲劇に繋がるかもしれない。

「ああ、ストロベリークオーツちゃん可愛い……！ 写真、写真………っ」と

立派なカメラを持ったふくよかな男性が、ドタドタと走りながら近くにやってきた。

あ、カメコだ。

カメコとはカメラ小僧の略で、コスプレイヤーの写真撮影を好む人のことだ。

「ごめんなさい。私、写真はNGなんです」

「はい、視線くださいーい！」

ダメだつて言っているのに、彼はシャッターを押し始める。

「ちよっ……ちよつと、やめてくださいー！ データ消してくださいー！」

「はい、スマイル、スマイル〜！」

ヤバい。全然話を聞かないタイプの人だ！

「ちよつと、やめてください。この子、写真はNGだつて言ってるじゃないですか。データ消してくださいー」

瑞樹が割つて入ってくれたけれど、まったく話を聞く様子を見せない。

「あつ！ エンジェライトちゃんとの2ショット、いいね！ いいねえ〜！ もと顔を寄せ合っ



てっ。百合最高うう〜！ はい、チュマイルーッ！」

チュマイルーじゃないしっ！ なにこの人っ！ 気持ち悪いっ！

そのうち寝そべって、際どい角度から撮り始めた。

「おパンチュの再現度はどうかな〜？ はい、邪魔なスカートよけますよお〜！」

カメコは上半身だけ起こして私のスカートの端を掴むと、そのままくり上げようとしてくる。

「ちょよ、ちよつとおっ!?」

「うわ、あの人、またいる！ 知ってる？ ある意味有名人だよね」

「うちも知ってる〜！ この前も別のイベントで騒ぎ起こしてたよね。キモ……」

どうやらマナー違反で有名なカメコらしい。

運営に助けに入ってもらいたいのに、ちょうど別のトラブルに対応しているようで、こちらに気付いてもいなかった。

こんな画像、SNSに出回ったら精神的に即死ものだし、出回らなかったとしても所持されること自体が嫌だ。

膝上のミニスカートだから、万が一のため、下着が見えないようにインナーを穿いている。でも下着じゃないとはいえ、やつぱり嫌〜……！

スカートの裾を押さえて「やめてください」と強く言うことしかできず困っていると、長身の男性が近付いてきて床に寝そべるカメコの背中を踏ん付けた。

「痛っ……！ ちよつ……なにするんだよお！」

カメコは大声を上げて激怒するけれど、背中を踏まれているせいで起き上がれない。

『「なにするんだ」はお前だ。変態か。警察に突き出されて当然のことしてるって、わかってんのか？ ほら、カメラ貸せ」

す、すごい。かつこよすぎでしょ！ ……ん!?

彼の顔を見て、ギョツとする。私を助けてくれたのは、二週間前に出会ったタイガーアイ様似の男性だった。

「一花、この人……」

瑞樹も気が付いたようで、こっそり耳打ちしてくる。

な、な、なんでこんな所に!?

彼はカメコからカメラを奪い取ると、勝手に弄りだした。

「おい！ ぼ、僕のカメラに触るなよ！」

「ルール違反した罰だ。データ、削除するからな」

「なっ……なんの権利があつてそんな……やめろ！ 僕のお宝写真だぞ！」

必死にカメラを取り返そうと暴れるけれど、手足をバタバタ動かすことしかできない無様な状態になっていた。

「これで消えたな。ほら、返してやる」

男性はカメコの前にカメラを置き、彼がカメラを手に取った瞬間、足を退けた。

「あ……ああ……本当に消えてる……っ！ ストロベリークォーツちゃんとエンジェライトちゃん

のおパンチュが……」

パンツじゃない！ インナーだったの！ ていうか、どっちにしろ最低っ！

「今度同じようなことやったら、警察に突き出すぞ」

「どうかしましたか!？」

ようやく別件のトラブルを片付け終えた運営がこちらにやってくるのを見て、カメコは慌てた様子で会場から走り去っていった。

「写真NGだつて説明しても強引に撮ってきて……でも、この方が助けてくれたので大丈夫です」  
固まってなにも言えずにいる私の前に瑞樹が立って、話してくれた。

「そうでしたか。対応が遅くなって申し訳ございませんでした」

「小太りで眼鏡、右目の下にホクロがありました。すでに全部消しましたが、デジカメのデータにこの人たち以外にも、明らかに嫌がっている女性コスプレイヤーの写真がたくさんあったので、早急に措置を取ったほうがいいと思います」

「そうだったんですね。わかりました。人物を特定出来次第、対処します。他のジャンルの運営にも、情報をシェアしますね」

「はい、お願いします」

運営は私たちやタイガーアイ様似の彼に深く謝罪してから、持ち場へ戻っていった。

「本当にありがとうございます」

瑞樹が彼にお礼を言うと、「いえ」と簡素な言葉が返ってくる。

くそー……悔しいけど、恩着せがましくあれこれ言わないところがカッコいい。

私もちゃんとお礼が言いたい。

彼は私の顔なんて覚えていないだろうし、コスプレしているから覚えていたとしてもわからないに違いない。

そう考え、瑞樹のうしろに隠れていたけれど、意を決して前に出る。

「あの、助けてくれてありがとうございます。本当に助かりました」

お辞儀をしてから頭を上げて彼の目を見ると、眉を擗めてジトリと見つめられた。

え、なに？

「お前、八越デパートにいた、奥本だろ。エンプレスの店員にフルボッコにされて、情けなくモジモジしてた奥本」

「えっ……」

なんでわかるの……!? というか、なんで名前知ってるの!?

「いやぁ……違います、よ」

冷や汗をかきながら否定すると、ククツと笑われた。

「お前さ、嘘吐くの下手すぎ。コスプレしてるから、わかんないとも思ったのか？ 普通にわかるぞ」

ああ、これは言い逃れができない……

「あ、あのー……このことは内密にお願いします。バレたら、その、まずくて……」

口止めしなくとも、「八越デパートの奥本つてヤツがコスプレイヤーだったんだよ」なんてこと言うとは思わない。でも、過去のことがトラウマになっていて、約束をしてもらわないと落ち着かない。

「へえ、そうなんだ」

「はい……」

頷くと、彼は上から下まで私を品定めするように眺める。

ちよ、ちよつと、なに、その目……！

「……うん、この前も思ったけど、いいな。理想的」

「え？」

いいって、なにが……？

「その場でクルッと回ってみてくれるか？」

「え？ え？」

「ほら、早く」

「はあ……」

なんで、そんなことを……

怪訝に思いながらも言われた通りにクルリと回ってみると、彼は満足そうに頷く。

「うん、やっぱりいいな」

だから、なにが……？

「ヒール履いてるから、それを引くと……身長は百六十センチってところか？」

「は、はあ……そうです」

「体重とスリーサイズは？」

「はっ!? そんなの教えるわけじゃないですかっ！ いきなりなんなんですかっ……!」

この人、さつきから意味不明なんだけど！

「お前に折り入って、頼みたいことがある」

「は？」

なに、それ……というか、知り合ったばかりの人にそんなこと言い出すなんて、どう考えても怪しいんだけど……！

「嫌です！」

石を投げられたら反射的に避けるように、私は間髪を容れずに断った。

「まあ、突然言われたら、そうなるよな。どうしたら聞いてくれる？ 金か？ いくらなら考えてくれる？」

お金……！

キュンとしたけど、いやいやいや！ と首を左右に振った。

「確かに私のお財布は薄っぺらいですし、お金がもつとあつたらいいなく！ 宝くじ当たらないかな？ とか常々考えてますけど、見ず知らずの人にお金をたかるなんて真似しません！ どんな条件でも聞きませんよっ！」

「……ふうん？ どんな条件でも？」

ジツと見つめられると、変な汗が出てくる。

み、見ないでよ……っ！ ただでさえパニックなのに、余計パニックになる……！

頭が真っ白になって、口が勝手に動く。

「ど、どんな条件でもですよっ！ コスプレが趣味だって会社の人にバラされたとしても、私は絶対、絶対言うことなんて……っ」

——あ、なんか私、余計なこと言ってる……っ！

「ふーん。じゃあ、バラすか」

「はあ……っ!? え……ちよっ……」

「バラされても、言うこと聞くつもりはないんだろ？ じゃあ、バラす」

「や、やめてくださいよっ！ なんのために、そんな……」

「腹いせ？」

「はああああ!?」

な、なんなの、この人……っ！

「バラされなくなかったら、今夜八時に丸の内のハレスホテルのバーで待ち合わせな」

「……は？」

「だからバラされなくなかったら、そこに来いって言うてんだよ」

「はあ!? お、脅すつもりですか!?」

「夜景と美味い酒が自慢のバーだ。ああ、そんな店に行ったことないから、緊張するか？ じゃあ、お前でも気後れしないような庶民的な店での待ち合わせに変更するか」

「ばっ……馬鹿にしないでくださいよっ！ 行ったことありますしっ！」

いや、行ったことないけど！ そこはほら、認めたら負けになるっていうか、なんていうか……！

「じゃ、問題ないな。……ああ、一人で来いよ。じゃないとバラすぞ」

彼は言いたいことを一方的に告げると、さっさと会場から出て行ってしまった。

問題大アリだよ！ あああああ……妙なことになっちゃった……

「瑞樹、どうしよう……」

「もう、馬鹿！ 一花は墓穴掘りすぎなんだよっ！」

「だ、だつて……」

「バラされてもいいから、行っちゃダメ！ 危ない目に遭うよ。ホテルのバーなんて、絶対その後、部屋に連れて行かれる流れに決まってるじゃん！ なんかあの人、妙に一花の身体ジロジロ見てたし！ 絶対、身体目的だよ！」

やっぱり、そんな流れ……？

血の気がサアツと引く。

いくらタイガーアイ様に似てても、それは絶対嫌——！



ファーストキスだってまだなのに、脅おどされて処女喪失なんてエロ同人でよくある展開みたいなパターンは絶対に嫌だ。バラされたとしても行かない!

……と思っていたのだけど、約束の時間が近付くにつれて、高校時代オタバレした時のことがフラッシュバックして、気が付けばホテルのバーに足を踏み入れていた。

こんな所に来たの、初めて……

足元はフカフカの赤い絨毯じゅうたんが敷き詰められていて、ヒールだと少し歩き辛い。こういうところに行き慣れている素敵な女性なら、スマートに歩けるのだろうか。

薄暗い暖色系の照明の店内には品のいいジャズが流れていて、バーテンダーのうしろにはたくさんのお酒が並んでいる。

カウンターに一人で座っている男性の姿を見つけて、ドキッとすする。

うしろ姿でわかる。悔しいけど、うしろ姿もイケメンだ。

——タイガーアイ様がバーにいたら、こんな感じ? 妄想したら止まらない。ストロベリークオーツちゃんと一緒にバーに来て……あ、まだ二人は付き合っていないって設定ね。んで、呑みすぎたストロベリークオーツちゃんが帰れないぐらい泥酔でいすいしちゃって、仕方なくホテルに泊まることに……って、そんな妄想してる場合じゃなかった。

「あ、あのー……」

恐る恐る声をかけると、タイガーアイ様似の彼が振り向く。

「ああ、逃げずに来たか。まあ、逃げてでも職場に行くつもりだったけど」

「うわっ! そこまでします!」

「する。用があるからな」

や、やつぱり、身体目的!? もしかしてこいつ私のこと、エロ同人みたいに乱暴する気!? エロ同人みたいにーっ!

「まあ、座ってなんか頼めよ。なにがいい?」

メニュー表を受け取ると、値段がすごくて驚く。

一杯二千三百円!? た、高っつ! 漫画五冊買える値段なんですけど! 勿体もったいない! 払いたくない! 今すぐ帰りたい! でも、帰るわけにいかないし……

「ノンアルコールって、どれですか?」

「なに、お前、酒苦手?」

「いや、苦手ではないですけど、特別好きでもないですし、あんまり強くないので……」

「ふーん?」

酔って部屋に連れ込まれたら嫌だし! という言葉をなんとか呑み込み、ノンアルコールのモヒート頼んだ。

緊張して、喉がカラカラだ。一口飲むと、ミントとライムの風味が口の中に広がる。

美味しい！——けれど、これで二千三百円かと思うと、ミントとライムの爽快感がどこかへ飛んで行ってしまおう。

うう、やっぱり高すぎ……

「あ、の……もう、いきなり言わせてもらいますけどっ！」  
「なに？」

「黙っている代わりに身体を……っていうのは、絶対に嫌です！ どうか勘弁してください！ コスプレ趣味をバラさない代償は、なにか別のことでお願いします……！」

頭を深々と下げてくださいすると、反応が返ってこない。

あれ？

恐る恐る顔を上げると、お腹を抱えて笑われた。

な、なんで笑うの……!?

「俺の頼みが、やらせろってことだとも思ったのか？」

「……っ……いや、だって、ホテルのバーっていうし、スリーサイズとか聞くし、そういう流れ……だと思って」

そう答えると、また大笑いされた。

腹立つ……!!

「安心しろよ。お前の貧相な身体に興味はない」

「貧相!？」

失礼な！ 普通体型だし！ 胸だってCカップはあるんだから！ と言いたいのをグツと堪え、眉間に皺を寄せて睨んだ。

「じゃあ、なんでこんな所に呼び出すすか！ 紛らわしいんですよ……」

「こういう場所のほうがち落ちて話せると思ったからだ。あんな所で話すには差し支えのある話だったからな」

「差し支えのある話？」

「まずは俺の自己紹介からしとくか。ほい、これ名刺」

「あ、どうも……」

名刺には『株式会社パルファム 代表取締役社長 円城寺昂』と書かれていた。

「代表取締役社長!? パルファム……って、どこかで聞いたことがあるような……」

「ローズ・ミラーとか、トゥールヌソルとか、スノードロップ・ルルってブランドを知らないか？」

「知ってます」

あ、そっか。どこかで聞いたことがあると思ったら、たくさん有名ブランドがあるアパレル会社だ。

「……って、え!? すごっ！ こんなに若いのに、あの大企業の社長!? あ、もしかして若く見えるだけで、結構歳いってます？」

「三十一歳だよ。継いだばかりだからな。父親の会社なんだ」

「ほへへ……そうなんですか」

なんか違う世界の人って感じた。イケメンで代表取締役社長って、すごい……まあ、性格は最悪だけどねっ！ というか、なんでこんな人がオタクイベントにいたわけ？

「お前の苗字は奥本で、下の名前は？」

「一花です。ちなみに二十六歳です」

「ふーん、デパート勤務で、なんの仕事してんの？ 八越には何度か足運んでるけど、接客してるところは見たことないな。内勤？」

「女性ファッションフロアのレジ係です。接客はないので、一応内勤ですかね」

「ふーん」

なんでこんな話に……

「あの、本題に入ってもらえますか？ 頼みってなんですか？ 私がオタクってことをバラさない代わりに、なにかさせるつもりなんですよ？ さっさと行ってもらえますか？ 死刑宣告を待ってる罪人ざいにんみたいな気分なんですけど！」

ジロリと円城寺さんを睨むと、また笑われた。

なんか、馬鹿にされてない？

「じゃあ、単刀直入に言わせてもらおう。お前、俺の家に住み込んで、トルソー代わりになれよ」  
「……は？」

「俺が頼んだ時に、俺のデザインした服を着て見せて欲しい。それ以外は、普通に暮らしてくれて構わない。それが俺の頼み」

はあああああああ？

「ああ、もちろん同居に期限は設ける。ずっとじゃなくて、来シーズンのデザインが固まるまで。それでどうだ？」

「いや……どうって言われても、色々突っ込みどころ満載まんざんです。第一、社長なのにデザインするんですか？」

「ああ、役職を継ぐ前は、デザイナーだったんだ。今もうちの看板ブランドのローズ・ミラーのデザインは続けてるし、他のブランドの監修もしてる」

「ほああ……そうなんですか」

「なんだその間抜けな声」

「いや、なんか驚きで」

イケメンで、社長で、デザインまでできる？ なに、どれだけハイスペックなの？ なんか眩まよしい！ 太陽直視してるみたいなんですけど！ いや、太陽は直視できないけども！

「来シーズンに向けて、今までにない新しいデザインを生み出したいと思ってるんだけど、どうもインスピレーションが刺激されなくてさ。実際の人間をトルソーにできたら、いいアイデアが浮かぶんじゃないかって漠然と思ってたなら、お前に出会ってさ。ビビッときた」

「ビビッとって……」

それって私が、よほど円城寺さんの好みだった……的な！

「いや、もう驚いた。だって理想が歩いてるんだからさ」

なに、このシンデレラストーリーのな話！

「り、理想って、そんな……」

「十人並みの容姿と、平均を絵に描いたような体型、お前こそ俺の理想としていたトルソーだ」

「はっ倒しますよ。お断りです！」

自分の容姿が平々凡々か、それ以下なのだろうと自覚はあつたけれど、改めて言われると腹が立つ。

なんて嫌な奴！

「なんで？ あ、彼氏がいるから男の家に住むのはまずいとか？」

「彼氏なんていませんけど、嫌ですっ！」

フンツと顔を背けて、あからさまな態度を取ってやった。

「ふーん、じゃあ、バラされてもいいのか？」

それは困るけども、意地を張ってしまう。

「ええ！ ええ！ バラしたいんだったら、ご自由にどうぞ！ 私には長年オタクを隠し通してき

たスキルがありますから？ しらばっくれてやりますよ！」

「じゃあ、直接これを聞かせれば、相手に信じてもらえますな」

『ええ！ ええ！ バラしたいんだったら、ご自由にどうぞ！ 私には長年オタクを隠し通してき

たスキルがありますから？ しらばっくれてやりますよ！』

自分の声が隣から聞こえてきたのに驚いて円城寺さんのほうを見ると、スマホを持っていた。

「なっ……ろ、録音してたんですか!？」

「なにかに使えるんじゃないかと思ってな」

「なにかって脅す道具以外ないじゃないですか！ 最っ低！ 卑怯者っ！ イケメンだからって

いい気にならないでくださいよねっ！」

「罵倒するの、褒めるの、どっちかにしろよ」

はっ！ 私ったらつい……！ 悔しい！

「で、返事は？」

円城寺さんは録音したスマホを左右に振りながら、問いかけてくる。

本当に嫌な奴〜！

「普通に暮らすって言われても、無理ですから！ 他人の家なんて寛げませんし！ 私はデリケートな人間ですからっ！」

「まあ、確かに、職場でのオタバレを必要以上に怖がっているあたり変なところはデリケートそうだけど、他は凶太そうに見える」

「ちよっ……どこが凶太いんですか！」

「こういうところ？」

どういふところだよ……！ もう、いちいち腹が立つ！

「まあ、一度俺の家に来て、見てから決めろよ」

「は!?! い、嫌ですよ。よく知りもしない男の人の家に行くなんて!」



「襲われるとも思ってたのか？」

小馬鹿にしたような笑みを浮かべながら尋ねられた。

『お前ごときを襲うとも思ってたのか？ 大企業の社長で女なんて選り取り見取りの、この俺様が？（失笑）』

とても言われているような気がして、腹が立つ。

「思ってもせんけど……」

「じゃあ、決まり。飲み終わったら行くぞ」

ああ、変なことになってしまった……

——とはいえ、ひとまずついて行きはしても、あれやこれやと文句を付けて、絶対に断る方向に持っていこうと思っただけ……

「ひえ……」

円城寺さんの自宅は、文句の「も」の字も出ないほど素敵な三十階建ての高級マンションだった。マンションは駅から徒歩四分の場所にあり、コンシェルジュが二十四時間常駐していて、広いエントランスにはホテルのようにソファやテーブルが置いてある。しかも噴水まであって、口があんぐりと開いてしまう。同じ敷地内の一階にスパーやコンビニもあり、マンション内には、住人だけが使えるジムやスパもあるそうだ。

一生このマンションから出なくても生活できるじゃん……

二十七階が円城寺さんの自宅で、高級感溢れる黒の玄関ドア（使われている小さな部品すらも高

級そう）を開けると、広い玄関と長い廊下が広がっていた。

あ、こんな風景、テレビ企画の芸能人のお宅訪問！ みたいなヤツで見たことある。

「まず、ここがお前に使ってもらう予定の部屋だ。家具もカーテンもなにもないから、自分好みにしてくれ。特にこだわりがないって言うなら、こっちで適当に用意しておく」

玄関から一番近い部屋の扉を開くと、私の家のリビングよりも広い部屋があった。壁やフローリングは白で統一されていて、ウォークインクローゼットまである。

「次、リビングな」

とんでもなく広いリビングには、こんなサイズのテレビって売ってるの!? 電器屋さんでも見たことないんだけど！ と言いたくなるような大きいテレビがあり、憎たらしくなるほどオシャレなガラステーブルと、その前には革張りのこれまた大きなソファが置いてある。何人座れるの？ 五人？ いや十人くらいはいけそう。

このテレビでアニメを見たり、ゲームができれば、最高だろうなあ……

「リビングも自由に使ってくれて構わない。もちろんテレビも見たい時に好きなだけ見ていいぞ」

「いいんですか!？」

思わず食いついてしまうと、ニヤリと笑われた。

「ああ、もちろん。トルソーになってくれるのならな」

しまった……

「い、いえ、まだ、引き受けたわけじゃないですし」

「ふーん、まあいいや。次はキッチンな」

次々と紹介されていく部屋の数々は、信じられないほど豪華なものばかりで、油断するとまた口があんぐり開いてしまう。

料理教室を開くんですか？ って聞きたくなるぐらい大きいキッチンに、高級ホテルみたいな大きなお風呂に、なぜか洗面台が二つあるパウダールームに、ここでもなら住める〜！ って思えるほど広いトイレ……なにもかもがすごすぎて、目がチカチカする。

「んで、こつちがアトリエとして使ってる部屋」

扉を開けた瞬間、今までにないぐらい自分が興奮しているのがわかった。

広い部屋の中の大きな机には、デスクトップパソコンとたくさんさんのデザイン画が山積みになっている。机の隣にはトルソーがあつて、部屋の至るところに布が置いてある。本棚には資料としてなのか、ファッション雑誌がたくさん並べられていて、入りきらないものは床にも溢れていた。

すごい！ これがプロのデザイナーの仕事場なんだ……！

ここでどうやって作業してるんだろう。すごく気になる。

「お前、今日見た中で、一番いい顔してるな？ コスプレの衣装を作るってことは、こういうのも興味があるのか？」

「う……って、あれ？ どうして私がコスプレの衣装を作ってるってことがわかるんですか？ 話してないですよね？」

コスプレイヤーには衣装を自分で作っている人もいれば、人に頼んで作ってもらっている人や、

既製品で済ませる人もいる。コスプレイヤーだからと言って、衣装を作るとは限らないのに。

「あー……ああ、昼間イベント会場で、エンジェライトのコスプレイヤーと話してただろ。それ聞いてた」

「あつ！ そっか。なるほど……」

「ちなみに興味があるなら、作業中もこの部屋に出入りしてくれて構わないぞ」

「本当に!? じゃあ、作業を見てもいいんですか？」

思わず食いついてしまうと、円城寺さんにククツと笑いながら「構わない」と言われ、ハツと我に返る。

し、しまった。これじゃ、契約同居に乗り気みたいじゃない！ いや、かなり乗り気………というか、もうここに住んでもいいかな？ って気持ちになつていたのは否定しないけど。いやいやいやでも、ここは今日知り合ったばかりの男性の家であつて、普通に考えて了承するわけが……

「ほ、本当に、来シーズンのデザインが完成するまでにしてくださいよ！ 延長は絶対嫌ですからね！」

「ああ、わかつてる」

了承しちゃったよお！………！



一週間後、私は期間限定で彼の家に引越してきた。

「すごい。余裕で収まっちゃったよ」

私の部屋ではクローゼットの中からはみ出ていたオタクグッズたちが綺麗に収まって、さらにもない空間がかなりある。今までは物に囲まれた生活だったので、ちよつと落ち着かない。

「終わったのか？」

閉じるのを忘れていたドアから円城寺さんが顔を出す。

「あ、はい、終わりました」

「そういやお前、この家にいる間は前に住んでた家、どうするんだ？ もし退去してないんだったら、その分の家賃も払うけど」

「いえ、実家なので問題ないです」

家賃まで負担とか、太っ腹だなあ……さすがセレブ！

「親御さんになにも言われなかったか？」

「友達の家でしばらくルームシェアするって言ったので平気です」

「なんか、学生が彼氏んちに転がり込む時みたいな設定にしたな」

「だって、知り合ったばかりの男の人の部屋でしばらく暮らす！ なんて言えるわけじゃない

ですかっ！」

「まあ、それもそうか。んじゃ、改めて今日からよろしく。リアルトルソー、期待してるぞ」

「はあ……なにしているかわかりませんが、よろしくお願ひします。リビングのテレビ、たびたびお借りすると思うので」

「好きにしろよ」

「うるさいって言われても、深夜まで起きてるのはやめられないですよ」

「だから好きにしろって」

苦笑する円城寺さんの顔を眺めると、綺麗な顔立ちで改めて驚く。

そしてタイガーアイ様が三次元に現れたら、きつとこんな感じなんだろうなあとと思う。そんなことを考えていた私の顔を、円城寺さんがジッと見返す。

あ、ついジロジロ見ちゃった。

すぐに目を逸らそうとしたところ、顎を掴まれた。

「それから……」

「え？」

綺麗な顔が近付いてきて、気が付いたらチュッと唇を重ねられた。

……………ふあ!?

「お望みなら、こっちもサービスするけど？」

今、キスされた……!? うん、された！ 完全にされた！

「そつ……そんなサービスいりません!」

私は弾かれたように円城寺さんから距離を取り、部屋の隅まで移動した。広い部屋なので、ドアの前にいる円城寺さんとはかなりの距離を取れた。

「や、やっぱりそういうつもりで呼んだんですかっ!? エロ同人の展開みたいに乱暴する気ですかっ! エロ同人みたいにっ!」

「エロ同人、エロ同人って連呼するな。嫌ならしないから安心しろ。ただお前がジロジロ見てくるから、キスして欲しいのか? って思っただけだ。ほら、そんなに離れてないで、こつち来いよ!」

「ほいほいと挨拶あいさつみたいにしないでください! 外国人じゃないんですからっ! 嫌ですっ! これから私の半径一メートル以内に近付かないでくださいっ! 近付いたら『エロ同人』って連呼しますよっ! エロ同人っ!」

「もはや語尾がそれになってんじゃねーか。つか、半径一メートル以内に近付くなって、小学生みたいな言い草だな!」

へんてこな同居生活が始まると同時に、私はファーストキスを済ませてしまおうということでもないアクシデントに襲われたのだった。

うう……これから、どうなるんだろう……

## 二着目 新しい生活

実家を出て、いきなり人の家で生活なんて……選択ミスっちゃったかな。ストレスで胃をやられたらどうしよう! 胃薬買っておこう!

なんて思っていたけれど、まったくそんなことなかった。

円城寺さんの家に引っ越してきて、今日で一週間と四日——私はまったくストレスを感じずに生活している。

大きなテレビでプレイするゲームは最高に迫力があるし、アニメ鑑賞は映画館で見ているかのようだ。

仕事を終えて帰宅後、ゲームをプレイしたり、アニメを見たりするのをただでさえすごく楽しみにしていたのに、最近ますます楽しみになってしまった。

ああ、なんて充実した日々……

今日もリビングの大画面テレビでゲームを起動する。

……歌穂さん。今日もオフラインだ。

ここ最近ゲームにもSNSにも姿を現してる様子がないし、私が独り言を発信してもまったく反応がなかった。